モーリス・ベジャール作、バレエ『THE KABUKI』(1986 年)：文化転移による伝統の変容と、散りゆく桜の美学に関する考察 —— グローカルな視点を通して

田邉 和可子 （パリ第 1 大学 パンテオン ソルボンヌ）

歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』をバレエに翻案した、フランス人振付家モーリス・ベジャール(1927-2007)の『THE KABUKI』は、日本の伝統がいかに 1980 年代のバレエにおける前衛となったのか、という問題を提起する。文化転移は、文化的コード(例えば歌舞伎の型)が、文化の媒介者(芸術家や翻訳家)によって、異なる文化に伝達されるプロセスで、受け入れ側のニーズに沿って大きく変容する現象である。この文化コードの解読、翻訳による変容は、第三の文化、メティサージュを生む。侍の散りゆく桜の美学は、どのように西洋の芸術、観客に翻訳されたのだろうか、西洋に類似の感性は見つかるだろうか。日本の感性が加わり、ベジャールのバレエ美学が広がってゆく。

ベジャールと歌舞伎の出会いの意義は、伝統などのローカルなものとグローバルの共存を叶えるグローカルな視点を通して探求される。グローカルな現象は、グローバル化した世界において、多様性を守るための指針となるだろうか。執筆者による『THE KABUKI』のプロデューサーやダンサーへのインタビューは、作品制作から振付解釈、演出の伝統と改良における、日本と西洋の友好的なコラボレーションの記憶を照らし出す。ベジャールのインタビュー記事と併せて、このような一次資料から『THE KABUKI』と歌舞伎、二つの文化間の類似性、関連性を分析し、推論を検討し、その関係性を明らかにしたい。

ベジャールによる総合芸術としてのバレエ制作の試みに、総合芸術としての歌舞伎が呼応する。さらに、仏教にインスピレーションを得たワグナーのライトモチーフが、繰り返しのメロディーで輪廻転生を想起したと指摘されるように（Osthoff 1983 ; Suneson 1989 ; Komiyama 2005)、『THE KABUKI』にも輪廻転生を連想させる演出が見受けられる。ワグナーの自伝『わが生涯』には、「仏陀は人に出会うたび、その人のさまざまな転生を思い出す。仏陀のこの話によって、私は反復するモチーフを対位法として使うことで、そのような記憶を想起させることを思いついた。」と記されている。(Wagner, *Ma vie*, 1983 : 331)[引用者訳]

本発表では、日本と西洋に共通する感性を見つけるため、総合芸術やワグナーの美学を通して、『THE KABUKI』における死、輪廻そして永遠への憧れの表現を考察する。インド文化の先行研究をも辿ることで、日欧の比較研究で生まれる歪みを三点観察によって解消したい。シヴァとディオニュソスの誕生の時代から西洋に大きな影響をもたらしてきた東洋のインド文化。その神秘思想を受け継ぐドイツ・ロマン主義、象徴主義の詩人が詠む「永遠への憧憬」、「還らぬ時への郷愁」は、和歌の心、散りゆく桜を想う「もののあわれ」に通じてゆくのだろうか。